

マタイによる福音書 6 章 13 節 「誘惑にあわせず」

「私たちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください」。私たちの祈りでは、「我らを試みに遭わせず、悪より救い出したまへ」です。「誘惑」と「試み」をまず見ていきましょう。誘惑とは、辞書で「心を惑わせ本来の意図に反する方向へと誘い込むこと」とありました。つまり、自分にとって心地よいと思われることへの誘いです。一方「試み」とは、「テストする」あるいは「試練」という意味にもなります。原文は「ペイラスモス」いう、「誘惑」と「試み」とも訳せる言葉が使用されています。誘惑も試練も、神さまを信じることから離れさせる原因となるという、共通のことがあります。ですから「私たちを誘惑に遭わせず」というように祈るということは、「私たちが神さまを信じられなくならないようにして下さい」という意味であると言ってよいと思います。「試みに遭わせないでください」という祈りは、私たちがテストして不合格にするようなことをしないでください、ということです。人に対してやめてくれと言っているのではなく、神さまに対して祈っているのです。

そして後半の「悪より救い出したまへ」。この「悪」は「悪い者」と訳しても良い言葉です。悪い出来事や悪い人によって、自分が不合格になってしまうことがないようにしてください、ということです。それを神さまに求めています。悪い出来事が起こらないようにしてください、ではなく「悪より救い出したまへ」。悪はいつも私たちの周りにある。そこから救い出してください、と祈りなさいということです。悪の力によって自分が不合格になってしまわないようにしてください。それを神さまに祈っているのです。信仰があるということは、自分自身よりも、神さまが第一ということです。それが神に従うということ、信仰ということです。しかし、私たちは自分の思いを優先してしまうことがあります。創世記の3章には、最初の誘惑が書いてあります。蛇の誘惑とありますが、結局アダムもエバも自分の気持ちを優先してしまったということです。神さまの言いつけよりも、自分の気持ちを第一にしました。不合格になったということです。神さまよりも自分を第一にするように、という蛇の誘惑は毎日毎日あります。いろいろな出来事が、私を神さまから引き離す力になります。けれども私たちは、この通り教会に帰ってきています。アダムもエバも誘惑に負けました。それが人間の現実だと聖書は言っています。そんな弱い私たちなのに、今もこうして教会に来ている。これは、神さまが私たちを救い出してくださっている証拠です。「我らを試みに遭わせず、悪より救い出したまへ」。私たちの力では勝つことができない戦いから、私たちを救い出してくださる方です。だから私たちは、この祈りを祈りつづけていきましょう。神さまは私たちの祈りを聞いてくださる方なんです。

そして最後に、「国と力と栄とは、限りなく汝のものなればなり」と主の祈りは続きます。これは祈りというよりも、賛美・頌栄と呼ぶべきものです。人々が後から加えた言葉であっても、決して余計なものではなく、神の栄光をほめたたえる、それですべてが終わる、そうせずにはいられない、これは私達もよく知っている信仰者の心です。自分達の信仰の歴史を振り返ってみても、今自分が生かされていることを考えてみても、私達の祈りは「感謝・賛美・願い・とりなし等々」と共に、祈りは、「国と力と栄とは限りなくなんじのものなればなり、アーメン」との頌栄をもって締めくくられるべきものと思います。私たちも、主の祈りを教えて下さった主イエスさまに感謝し、神さまをほめたたえて、この学びを終えたいと思います。どうか主の祈りを豊かに祈って、毎日をお過ごし下さい。